

音楽科教育におけるアジアの民族音楽の教材化

—表現と鑑賞の一体化による理解の深まりを目指して—

新福 一孝

21世紀はエスニシティの世紀だといわれる。政治・経済面での国際協力だけでなく、世界の民族のもつ多様な社会や文化に対する理解と関心も高まり、人類共通の遺産として尊重・継承していこうとする動きが全世界的に展開されていくと思われる。そのような時代に生きていく生徒たちにとっては、世界の民族の社会や文化を認め会えることが大切になる。音楽の授業において民族の心をうたいあげた世界の民族音楽に親しむことは、世界のすばらしい音楽に接し、人間の文化の結びつきなどにも気づき、異文化理解を深めることができると考える。この論文では、世界の音楽の中でもアジアの民族音楽を取り上げ、これまでのCDやLDの鑑賞を中心に理解をした授業から一歩進み、表現活動を取り入れることでより深い理解、感受にしていけるような活動を探っていくことにする。

I 民族音楽の教材化をするにあたって

1 民族音楽学習のねらい

世界中には様々な音楽があり、どの地域でも、誰でもその音楽を大切にしているということを知ることが出発点となると考える。そのためには、次のようなねらいを設定していく。

- ア. 世界各地には、自分の知らない素晴らしい音楽がたくさんあることに気づく。
- イ. 国や地域、民族によって、音楽の特徴がちがうことに気づく。
- ウ. 同じ国や地域、民族のなかでも、多様なジャンルの音楽が共存していることに気づく。

2 民族音楽を総合的にとらえる

民族音楽を単にその音楽だけ、見た目だけで理解したり、感じたりすることは、「自分たちと違う」というレベルで終わってしまう可能性をもつといえる。その地域の人々の気持ちに近づくことが正しい理解や感じ方をすることにつながると考える。そのためには、その音楽をとりまく様々な要素から総合的にとらえることが大切になる。

(1) 総合化の視点

- ア. 世界中のどこでも、音楽は暮らしや様々な文化とつながりをもっていることに気づく。
- イ. 世界各地に見られる、音楽、文学、造形、動きが一体となって構成されている民俗芸能

や伝統芸能、総合芸術に関心をもつ。

ウ. 実際に体験（疑似体験）できる民族音楽を表現する。

(2) 音楽をとりまく要素

- ア. ことば（歌詞内容、ことばのリズム・抑揚と音楽の動き）
- イ. 物語（ストーリーの展開）
- ウ. 演劇（劇の進行と音楽、役柄と音楽など）
- エ. 動き（舞踊、体の動き、楽器の技法、演奏の姿勢など）
- オ. 造形（楽器の形や色、舞台装置、衣装、化粧など）
- カ. 自然（地理、気象、季節など）
- キ. 社会（暮らしとのかかわり）
- ク. 宗教（儀礼の音楽、神話・物語の神々）
- ケ. 歴史（歴史的背景、歴史による変化など）

（「日本の音楽 世界の音楽」島崎篤子・加藤富美子著 音楽之友社 より引用）

これらの視点や要素に基づいて、授業でどのような民族音楽を取り上げ、どのような活動が設定できるか探っていくことにする。

II 民族音楽の教材化

民族音楽といっても世界中に数えきれないほどのものがある。ここでは、これまでに授業で鑑賞してきたものを基に、どのように表現活動を取り入れていくことができるか考えてみたい。

1. 取り上げるアジアの民族音楽

本校では第1学年でアジアの民族音楽、第2・第3学年でアジア以外の民族音楽を扱っている。その中でも表現活動がしやすいものとして、次のようなものを取り上げた。

- 朝鮮半島
アリラン, カヤグム, アジェン
- フィリピン
クビン, バリンビン
- インドネシア
アンクルン, ケチャ, ガムラン
- イラン
サントゥール
- トルコ
軍楽隊の音楽 (ズルナ)

2. どのように教材化するか

(1) アリラン, カヤグム, アジェン

アリランは、李王朝の圧政に対する民衆の抵抗の精神を込めて歌いだされ、貧農、労働者、囚人らによって全国的に広められていった。数多いアリランの中で、もっともよく歌われるのは、男女の別離の悲しみを歌ったものである。李王朝末期から日本支配下におかれた時期は、日本帝国主義支配に対する反抗の歌としても多くの歌詞をつけて歌った。朝鮮半島各地には、それぞれの地方色を強く反映した各種のアリランが歌いつがれており、全国で80余にも及ぶという。それぞれのメロディーや歌詞はかなり個性的で、とても同一起源の民謡とは考えられないが、近隣のものが互いに影響し合っていることは十分に考えられる。

カヤグムは12弦の擦弦楽器で、ひぎの上に置いて素手で弾く。大きさは日本の箏よりも小さめである。ちなみに、日本の箏は13弦で台の上に置いて、爪で弾く。

アジェンは7弦の擦箏でカヤグムより胴が大きく、弦も太い。連翹(れんぎょう)の枝で擦って音を出す。荘厳な音色をもち持続的に音が出せるので宮廷音楽の合奏では、低音部を支える役目を果たした。

教材化にあたっては、学校にある日本の箏を使えないかと考えた。弦が太くて強いためにカヤグムの代用はやめた。そこで、アジェンの代用として使うことにした。弦は7本だけ使い、アリランに合うように調弦した。また、弓はチェロの弓を

使って弾くようにした。箏の演奏と歌を合わせて歌うようにするとよい。

〈アリランの楽譜〉

〔アジェンの演奏と歌〕



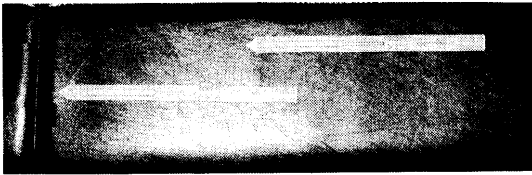
(2) クビン, バリンビン

クビンは口琴である。口琴は世界各地に見られ日本ではアイヌのムックリが同様の楽器である。中央部に切り出した弁の振動で音が生み出されるが、それを口腔に共鳴させることで多様な音色を出す。口腔の広さ・形状や舌の位置や形を微妙に変化させる。竹製の楽器である。

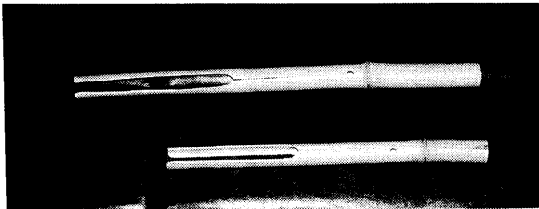
バリンビンも竹の楽器であるが、先端部分に二つに割かれた長い振動部分があり、根元のほうは筒のままという形である。右手で根元を持ち、左手に軽く打ちつけて振動させることで、うなるような響きが得られる。右手の親指は筒に開けられた穴を開閉する役割を担い、リズムに合わせて開閉を行うことで音色に微妙な変化を与えている。

教材化にあたっては、両者共に数人のグループをつくらせる。各自でリズムを考えさせ(リズムパターン、即興的なリズム)、組み合わせたり、ずらしたり、加えたりしながらリズムアンサンブルをつくっていくとよい。クビンは口腔や舌の形の変化、バリンビンは穴の開閉により、音色を工夫するとさらに豊かな響きが得られる。

<クビン>



<バリンビン>



(3) ガムラン

インドネシア，マレーシアを中心に発達した伝統的な合奏音楽。そのもっともユニークな特徴は楽器編成において様々な種類の旋律打楽器を数多く使用する点。旋律打楽器とは，木琴や鉄琴のように，一定の音階に基づいて調律された打奏楽器のことで，ガムラン楽器の場合はその振動部分の素材に青銅（まれに鉄）や竹，木などが用いられる。ガムランは，これらの旋律打楽器を主体として，他に太鼓，竹笛，ルバブとよばれる鼓弓，シンバル型の鳴り物等を加えた，打楽器中心の合奏音楽といえることができる。一般にガムランは「青銅と竹の交響楽」と表されるが，それはこのような楽器編成に由来している。

イスラム教の到来をきっかけとして，バリ，中部ジャワ，西部ジャワはそれぞれ異なる文化方向へ発展し，その結果，インドネシアのガムラン音楽には，次の三種類の地方様式が成立した。

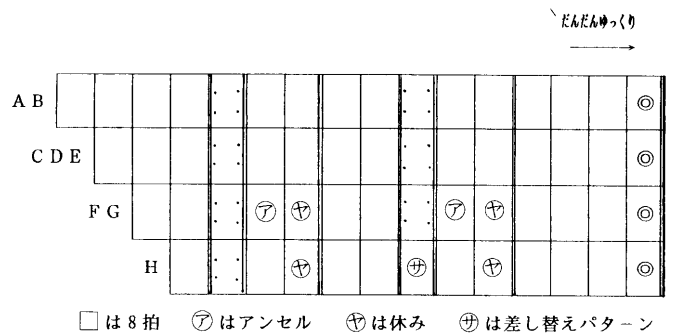
ア．バリ様式・・ヒンドゥー＝ジャワの伝統音楽に基づく宗教音楽

イ．中部ジャワ様式・・イスラムのサルタンの宮廷を中心に発達した宮廷音楽

ウ．西部ジャワ様式・・山岳地帯に点在する各地方都市の特色を生かした民衆音楽

教材化にあたっては，ガムランの演奏をパターン化した手順を示し（楽譜参照），それぞれのパートの楽譜により演奏する。（実際，ガムランでは楽譜は使わないため，教師の演奏を模倣して，リズムや旋律を把握することがベストであると思われる）また少しでも，ガムランの響きに近づけ，生徒に身近な楽器で演奏するためには，楽譜に示したようなものを使うようにするとよい。

<ガムラン演奏の手順>



<ガムランの楽譜>

～波～

マリンバの低音，バスタム



～波の補強～

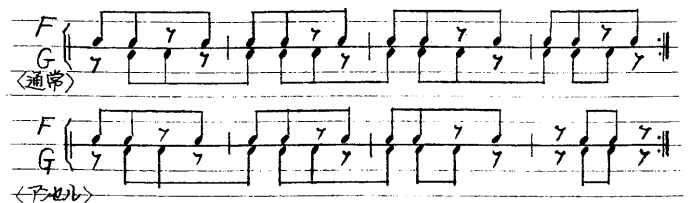
C ウッドブロック，木魚

D. E 銅鑼，大太鼓



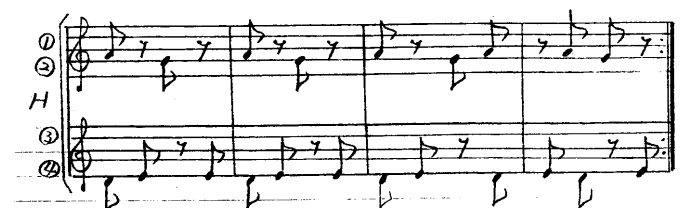
～つがいリズム～

シンバル，拍子木



～メロディー～

金属のサラダボウル，鉄琴，金床など



～メロディーの差し替えパターン～



楽譜は『ガムランを楽しもう』音楽の友社より

(4) ケチャ

もとバリ島で悪疫退治のために踊られてきたサンヒャン(恍惚状態にある娘たちが踊る)を1930年代に長編叙事詩ラーマヤナの物語を筋立てにして組み直し、男声による集団芸能としたもの。上半身裸の若者たちが、四つのグループに分かれて、16拍を単位としたそれぞれ特定のリズムで”チャ”と声を掛け合う。水田での共同作業を母体とした村の生活の中で生まれたものだけにその一糸乱れぬ歌と動きには目を見張るものがある。教材化にあたっては、楽譜を見ずにリズムを覚え(現地の人と同じように)他のリズムとの掛け合いを体ののりで覚えるようにするとよい。また、繰り返し、強弱など工夫してもおもしろい。

〈ケチャの楽譜〉

タンブール	シリリー	ブン	ブン	ブン
チャツ 3 (トクル)	チャツ	チャツ	チャツ	チャツ
チャツ 7 (ピトク)	チャツ	チャツ	チャツ	チャツ
チャツ 6 (ヌム)	チャツ	チャツ	チャツ	チャツ
アニア>ロツ	チャツ	チャツ	チャツ	チャツ
チャツ 5 (リマ)	チャツ	チャツ	チャツ	チャツ

●ボナ村のパターン

(5) アンクルン

オクターブで調律された竹片を木枠にはめ込み楽器を振って演奏する。ジャワ特有の竹製伝統楽器で、竹と竹のぶつかり合いが続くと、穏やかで耳に優しい音色を出す。通常はさまざまな大きなアンクルンを両手で持ち、1つの楽器が1つの音を担当してハンドベルのように、100台相当の

アンクルンが一斉に演奏され、インストゥルメンタルはもちろん歌の伴奏や太鼓とガムランとともに演奏されている。西ジャワでは、小・中学の音楽教育の一環としてさかんに演奏されている。

教材化にあたっては、日本でもよく知られている「AYO MAMA」(ママのそばで)を使いアンサンブルの形にした。(楽譜参照)楽譜は8人でできるようにしてあるが、人数が少ない場合は一人で2台もって演奏するとよい。

〈「AYO MAMA」〉

インドネシア民謡 (マクルン)

A-yo ma-ma ja-nga-lah-ma-rah be-ta Di-a cu-ma cu-ma cu-ma ci-um be-ta
アヨ マ マ シンガ ラ マ ラ ベ タ ディ ア チュ マ チュ マ チュ マ チュ マ ベ タ

A-yo ma-ma ja-nga-lah-ma-rah be-ta lo-orang mu-da-pu-nya bi-a - sa
アヨ マ マ シンガ ラ マ ラ ベ タ ローラン ムダ プニヤ ビア サ

Da-ri ma-na da-dat-ang-nya lin-tah da-ri-lah sa-wah tu-run ke-ka-li
ダリ マ ナ ダ タン ニヤ リン タ ダ リ ラ サ ワ トゥルン ケ カ リ

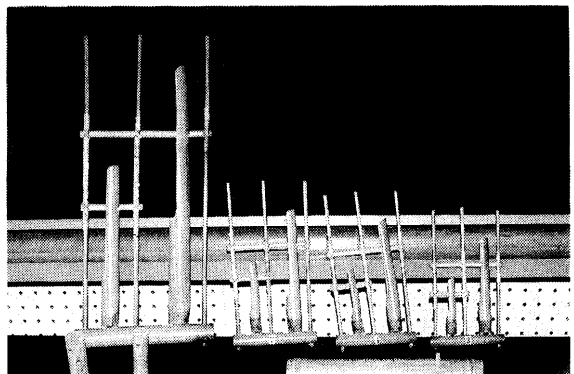
Da-ri ma-na da-dat-ang-nya cin-ta da-ri-lah ma-ta tu-run ke ha-ti A-yo
ダリ マ ナ ダ タン ニヤ チン タ ダ リ ラ マ タ トゥルン ケ ハ テ アヨ

Ayo mama janganlah marah beta わえお母さん そんばに怒らないで
Dia cuma cuma cuma ciyum beta 彼はただキスしただけなの
Ayo mama janganlah marah beta だから そんばに怒らないでお母さん
La orang muda punya biasa 若い私達にはよくあることよ
Dari mana datangnya lintah 蛭はどこからやってくるの
Darilah sawah turun ke kali 田んぼから川へおりてきたのよ
Dari mana datangnya cinta 愛はどこからやってくるの
Darilah mata turun ke hati 瞳をとって心へおりてくるの

(パート分け、8人で1グループ)



〈アンクルン〉



(6) サントゥール

ピアノのルーツといわれる。次第に短い弦を平行に張るため、台形をした共鳴箱にチェス駒のような駒を並べ弦を張り、木のスティックで打奏する。ペルシアから東西に広がった。カシミール～インド、イラク～トルコでもサントゥールという名前前で、各地の材質で各地の音楽を演奏します。東欧ではギリシャのサントゥーリ、ルーマニア、ウクライナのツェンバル、ハンガリーのツィンバロンが子孫で、アジアでは中央アジアのチャン、中国・韓国の揚琴、タイのキム・チンが末裔。西欧ではかつて広く使われていたが、今日ではオーストリアのハックブレッドとアイルランドのハンマード・ダルシマーが残るのみである。

「サント」はラテン語の「100」を意味し、「トゥール」はペルシア語の「弦」を意味する。

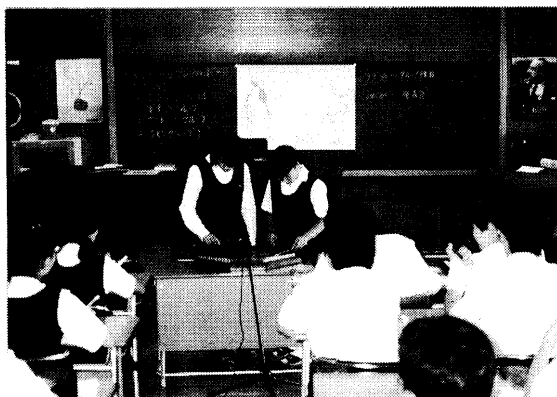
教材化にあたっては、実物はなかったが、台形の共鳴箱に弦を張った楽器を使った。また、パチは細い竹の先にたこ糸を強く巻き付けて作った。演奏は一人がメロディー、もう一人が2本のパチでハーモニーを演奏する（コード記号をもとに）形態をとった。

〈イラン民謡の楽譜〉

小麦の花

The musical score is written in treble clef with a key signature of two flats (Bb and Eb) and a 3/4 time signature. The tempo is marked as J=146. The score consists of five staves of music. The first staff begins with a C major chord (Cm) and a 3-measure rest. The second staff continues with Eb and G7 chords. The third staff features Cm, G, Cm, and Eb chords. The fourth staff includes G7, Cm, G7, and Cm chords. The fifth staff concludes with a G7 chord. The melody is primarily eighth and quarter notes, with some rests.

〈実際の演奏風景〉



(7) トルコの軍楽隊

軍楽隊は、活気に満ちたダイナミックな音楽で兵士たちを元気づけ、敵軍を恐れさせ、また勝利の興奮と喜びを表現する役割も果たしていた。軍楽隊メヘテルは、両面太鼓ダウル、オーボエ族の大型ズルナ、2個の鍋型小太鼓をつないだナッカーラ、ボル（簡単な構造のトランペット）、ズィル（シンバル）の5種類の楽器に、鈴のついた棒で拍子を取りながら歌う歌手たちで構成される

教材化にあたっては、まず打楽器で大太鼓、小太鼓、シンバルを用意した。管楽器ではトランペット、小型のズルナがあったため使用した。またクラリネットを吹ける生徒がいたため、演奏に加えることにした。なお、楽譜はCDやLDの演奏を聞いて採譜した。

〈実際の演奏風景〉



〈軍楽隊の演奏用楽譜〉
「ジュッティン・デデン」

♩ = 104

The image shows a musical score for a marching band. It consists of six systems of music. Each system has a treble clef staff with a melody and a bass clef staff with accompaniment. The music is in 2/4 time and features a mix of eighth and sixteenth notes. The score is written in a standard musical notation style.

LD「中学校の音楽鑑賞」より採譜

III まとめ

今回、世界の民族音楽について、これまでの鑑賞中心の授業から表現を取り入れたものに変えていくことはできないかということ考えた。特にこれからますます交流が盛んになるであろう身近なアジアの国々の音楽を取り上げた。実際には楽器もないし、単なる疑似体験にしか過ぎないのだが、表現してみることで、リズムのかみあう素晴らしさや旋律の美しさなどを少しでも感じ取ることができるのではないか。また、そのことで鑑賞の深まりが見られるのではないかと考えた。次の文章は、授業後の感想文であるが、理解や感受の高まりがみられる。

今回の授業を通して、アジアにはいろんな民族の音楽があることがわかった。しかも、それぞれの国の人たちはその音楽をすごく大切にしていることがわかった。自分にとって日本の音楽ってどんなものなのだろう。どんなものがあるか、どんなよさがあるか知らないような気がする。もっと

自分の国日本の音楽についても知り、世界の人に胸を張って教えてあげられるようにしたい。

実際の演奏とは少し違うけど、いろいろな音楽の演奏を通して、その難しさや素晴らしさがわかった。僕は、ケチャの演奏をした。ひとつひとつのリズムは簡単だけど、合わせると自分のリズムがわからなくなる。でも、感覚がつかめてくるとみんなと合ったときはすごくおもしろいリズムアンサンブルになって感動した。

日本の箏しか知らなかったのに、素手で弾いたり、弓で弾いたりすると音色や表現がこんなに変わるんだと思いました。それによって、楽器の大きさや弦の材質にも違いが出てくるのがわかりました。

このように、表現の活動を取り入れることは大切な活動であることがわかる。

世界にはまだまだ多くの国があり、その国の特徴的な音楽がある。伝統的な音楽もあるが、発展やほかの音楽との融合を見せたりして形を少しずつでも変えている音楽もある。しかし、大切なことは先入観だけでその音楽をとらえないことであろう。それぞれの音楽にはその社会的、地域的、歴史的背景があり、その中で生まれ、受け継がれ、大切にされてきた民族の宝物なのである。その人たちの立場に立って、その音楽を理解し、感じ取ることができる力を身につけさせることが大切なのである。そのためにも「世界のいろいろな民族音楽をどう教材化していくか」ということを考えながら今後も研究を進めていきたい。

参考文献

- LD「中学校の音楽鑑賞」解説 ビクター
- 「民族楽器大博物館」 京都書院
- CD「中学校の音楽鑑賞」⑩解説 ビクター
- ガブミ「インドネシア芸能情報」
- 「ガムランを楽しもう」音楽の友社
- 「世界の民謡めぐり」日本書籍